

二〇一七年、十月。

神奈川県警察本部捜査一課特捜部長の仁科亨参事官は面接の結果、警視庁刑事部へ部長として採用された。特殊犯管理官は不在のまま未だ人選に難航していたが、特殊犯捜査係の笹野大輔は主任の座を退き警視庁公安部外事第一課四係へ、捜査一課の佐伯和之は同じく外事第一課五係へそれぞれ配属が決まった。遠山哲司刑事部長は警視監へ昇任し公安部長へ、元公安部長野崎康弘は、警視庁副総監へ昇任した。

神奈川県警察本部長津山功は特別捜査幹部研修所時代の後輩を頭のとっぺんからつま先まで眺め、至極満足したようにひとしきり頷いた。

「哲司も公安部長か。世も末だ」

「どどういう意味だ」

遠山が笑うと、津山はシニカルな笑みを肉付きのいい頬に浮かべた。いたずら小僧のような笑顔になる。

「一生刑事部でブイブイ云わせると思っていたがな。隠居生活を選ぶとはどういう心境の変化だ？」

「疲れたんだ。俺も今年で大台だ」

本部長室は相変わらず上野辺りのショットバーを伺わせる作りのままだった。積み上げられた段ボール箱を除いて、勝手知ったる何とやらで、遠山はサイフォンからコーヒーを注ぎ津山へ差し出した。自分はずでに三杯目だ。

カップを受け取りながら、津山は上目遣いに視線をねじ込んできた。

「それだけか？」

遠山はソファに身を沈め、ひとつ深いため息をついた。口許に微笑を浮かべる。

「忘れたくなった。先へ進むために。目的地が一体どこなのかは依然として判らないが」

遠山の言葉に、津山は静かにカップを掲げた。

「ミスター警視庁の将来に幸あれ」

遠山もそれに倣う。

「未来の中華料理屋に乾杯」

津山は明日付けで神奈川県警を去る。警察大学校、防衛大、古巣の幹部研修所指導員と天下りの誘いはいくらでもあったが、それらを全て蹴った津山が第二の人生を歩むのは横浜中華街なのだ。料理好きが高じて調理師の免許を取得した。ハマと共に駆け抜けた刑事人生、娑婆を離れるのはやはり後ろ髪引かれる思いだったのだろうか。

「そのカップ、良かったら持って行け」

津山が顎で遠山の手元を示した。裏を見ずともその価値は判る。

「オールドノリタケじゃないか。しかも一九三七年の限定生産品だ」

「よく知っているな」

津山は眉を上げて驚嘆を表したが、すぐに納得した顔つきになった。

「お前が高級志向なのを忘れていたぜ。なおさら都合がいい。持って行ってくれ。テーブルセットだ」

津山が段ボールを漁り始め、遠山はその手元を覗き込んだ。写真立てに収まる古いスナップに目が止まる。

「その写真は？」

「これか？」

津山は写真立てを取り出し、ふうふうと息を吹きかけて埃を払った。

「同期の皆で撮った。ここへ来た年だから……今から三十年近く前だ。俺がどれだか判るか？」

言われるまでもなく津山の顔を指差した。

「これだろ？ 昔は随分痩せていたんだな」

遠山が意地の悪い微笑を浮かべながら津山を見遣った。県警本部長はぺろりと舌を出す。

「お前の不変さは異常だよ、哲司」

遠山は笑いながら再び写真へ目を落としたが、右上の人物を見た途端、心に強い揺さぶりを感じた。敏感な津山が目を上げる。

「どうした？」

「これは？」

「そいつは特捜部長だった男だ。知り合いか？」

「いや……」

「恐ろしい美形だろ？ 俺の右腕的存在で、良き理解者だった」

写真の中の男は確かに、世間一般の美の基準を遥かに凌駕していると言えた。

「ホシに殺された」

抑揚を押さえた津山の声に、遠山は写真から顔を上げた。

終わる。

「刑期を終えて出所してきたその足で。一家惨殺だった」

ひとつの記憶が。

「一人生き残ったのではなかったか？」

津山はゆっくりと首を振った。

「何か他の案件と勘違いしているんだろう。全滅だ。ホシもその場で首を掻き切って死んだ。最悪だった」

「そうか……」

遠山は写真を凝視しながら呟いた。

「息子がいたか？」

「ああ。当時高校二年生だった。父親そっくりの美しい青年だった」

津山は苦痛に顔を歪めた。

「可哀想に、左目を日本刀でぶっ刺された。傷は頭骸骨を貫通していた」  
消えていく。

「名前は？」

「伊織だ。佐竹伊織」

ひとつの並行世界が。